

巻頭言

生命の始まりと新生児看護

広島大学医学部保健学科 中込 さと子

遺伝カウンセリングの過程では、必ず「受精」について触れます。女性の身体の中で成熟する卵細胞も、男性の体内で生産される精子も、その1つ1つが豊かなものであってもまだ人間の生命ではありません。それらが融合し、受精してはじめて、新しいもの、まだ存在しなかったもの、過去にも未来にも存在し得ない唯一のものを産み出すのです。いいかえると受精とは、かけがえない1人の人間としての存在の始まりであるといえます。

受精過程に関する科学がより一層進歩したとしても、生命の始まりに対する神秘性が失われることはないでしょう。たとえば、精子と卵子の減数分裂の過程が解明されたことによって、同じ親から生まれても唯一無二の存在が生まれる必然性が理解できるようになりました。また現在は遺伝情報をもとに胎児の各器官や身体がどのように形成されるのか盛んに研究されていますが、胎児は単に遺伝情報だけで育つわけではありません。胎児は両親や家族からの惜しみない愛情の中に存在し、無限大の可能性を持って生まれてきます。その子どもがどんな成長を遂げるのか、計り知ることはできません。

さて、私たちはこれまで生まれたばかりの生命体である新生児に触れながら、その新生児がたどってきた受精と発生分化過程にどれだけ関心を寄せてきたのでしょうか。遺伝学を理解することは、ある一定の確率で生まれてくる染色体上の個性を持った子どもたちの捉え方を根本から修正することにつながります。また同時に、いかなる新生児に対しても、受精の段階から豊かに生きる力を本質的に備えている固有の存在であるという深い畏敬を自覚するきっかけになります。2002年度日本新生児看護学会教育講演会では「18トリソミー」が取り上げられ、人類遺伝学の専門家と、18トリソミーを持った子どもさんを育ててきたお母様の講演が企画されました。この機会に、純粹に「18トリソミーという染色体上の特性を持つ子どもたち」の生きる力についてもっと知りたいと考えた参加者は、決して少なくなかったでしょう。

新生児看護は、1つの生命が受精から始まり、胎児期を越えて生まれた後、最初にたどる人生に対して深く関与するといえます。私たちは新生児への看護を通して、自分に備わった生理機能や感覚機能などを最大限に使って力強く生き抜くことについて教えられます。また、私たちが行うケアに対して心地良い表情で応答してくれる新生児を通じて、他者を絶対的に信頼する純粹さを学び内省することもたびたびあります。そのたびに看護職者は、その時、その場で共に生きる1人1人の新生児の存在の尊さを再認識します。生きていくことが困難な新生児は少なくありませんが、どのような状況であれ個々の新生児の存在を尊び、新生児の立場で看護を行うという倫理的態度を失わずにいたいと思います。